

1 不登校対応に関すること

- 小・中学校における出席状況から
「中1ギャップ」の解消に向けた小・中連携に加え、早期対応として、小学校中学年からの不登校対応が望まれる。
- 当所利用者の現在の状況を踏まえて
将来における「ひきこもり」を減少させるために、将来を見通したアセスメントに基づいた多様な人材（リソース）での継続的なかわりが求められる。
- 中学校卒業から現在までの履歴を踏まえて
在学中及び卒業後の支援体制の円滑なつながりや、中途退学者への具体的な支援が求められている。
- 登校できなかった時期における学校での相談について
担任を中心に、その他の教職員やSC等、本人のリソースとして機能する人材を活用し、対応の連携を図るなど、児童生徒の心に届くかわりを継続する必要がある。
- 登校できなかった時期の学習の支援について
在学時の学習支援の有無は、その後の支援の必要性に大きく関与することから、登校できないとしても、学習補充の働きかけは必要であるとする。
- 登校できなかった時期に必要な支援について
「適応教室など継続的に通える施設や関係機関の紹介」「適応教室通級と当所の利用の併用」など、児童生徒の状況に応じた相談や対応が求められている。
- 登校できるようになったきっかけについて
気持ちの変化、環境の変化、新たな人間関係などをきっかけにして学校復帰を果たしており、きちんと向き合ってくれる人のかわりが必要である。
- 中学校を卒業したときと比べて、現在の自分が成長した点について
「人とうまく付き合えるようになった」が最も多く、他の児童生徒とかかわることなどを通して社会性を育む教育活動は不可欠と言える。
- これからの自分にとって大切なこと
「自信を持つ」「人とうまく付き合う」「働いて収入を得る」「孤独に耐える」ことなど、何らかの形で自立しようとする意識が顕著である。
- これからの生活において必要な支援について
「人間関係づくり」「同世代の仲間との交流」など人間関係づくりや人との交流、「学習」「技術や技能の習得」「社会的一般常識」など就労や社会的自立に向けた支援を必要としている。

2 但馬やまびこの郷の有効性に関すること

- 初めて利用した時期
学期中の登校状況や学校行事への参加状況を踏まえ、学校復帰をめざして、9月～12月に初めて利用する者が多い。
- 一番心に残っている活動
親近感や安心感を持ち、自分の思いや考えを素直に表現できる「やまびこタイム」が一番心に残る活動である。

- 一番印象に残っていること
利用者にとって一番印象に残っているのは、体や心が解放される「体験活動」や、自他を結ぶ「人間関係づくり」である。
- 一番安心できた人
心を開いてふれあい、自分の思いを素直に出し合うことのできる「友だち」が、一番安心できる人である。
- 3回以上当所を利用した理由
孤独や不安を感じる日常から離れ、自分を見つめながら安心して過ごせる場所であったから、多くの者が複数回利用している。
- 当所での活動や働きかけなどへの要望
学習や相談の時間を設けること、個々の課題に対応することなどを望んでいる。
- 当所での体験を通じて、当時、自分が変わったこと、感じたことについて
普段の緊張と不安が低減し、自分の長所や得意なことを見だし、友だちとともにがんばろうという意欲が高まっている。
- 当所での体験で、その後の生活に役立ったこと
人間関係の構築、社会への適応、興味や関心の広がりなど、その後の生活に役立っている。

〈調査上の課題について〉

- ・今回の調査で χ^2 検定を行ったが、重複回答の者や無回答の者の取扱い、現在の外出状況の群における人数の偏り、年齢幅の大きさなどについて問題があるため、一つの情報として捉え解釈するには慎重さを必要とするデータ処理となっている。
- ・但馬やまびこの郷の経験を含め、現在までのあらゆる経験が現状に影響していると考えられ、今回の結果から、何が直接的にその本人に効果があったのかについては明らかにすることは難しいといえる。
- ・今回アンケートの回答者の多くは、普段から外出している者や現在支援を受けられている者が多かったため、普段から外出ができない者や現在支援を受けられていない者の状況などを明らかにすることはできなかった。